

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

赤十字 NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS

<https://www.jrc.or.jp>

SEPTEMBER 2022 NO.988

令和4年9月1日(毎月1日発行) 赤十字新聞 第988号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

9



わたしも赤十字 寄付の協力者 むらかみ ゆかこ 村上由佳子さんご一家さん【P.4でご紹介】

特集

アイツ 大地震がくると暴れだす!? あなたの家は本当に安全ですか?

おうちの中のモンスター!

赤十字の最新情報をSNSでチェック!



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

人間を救うのは、人間だ。

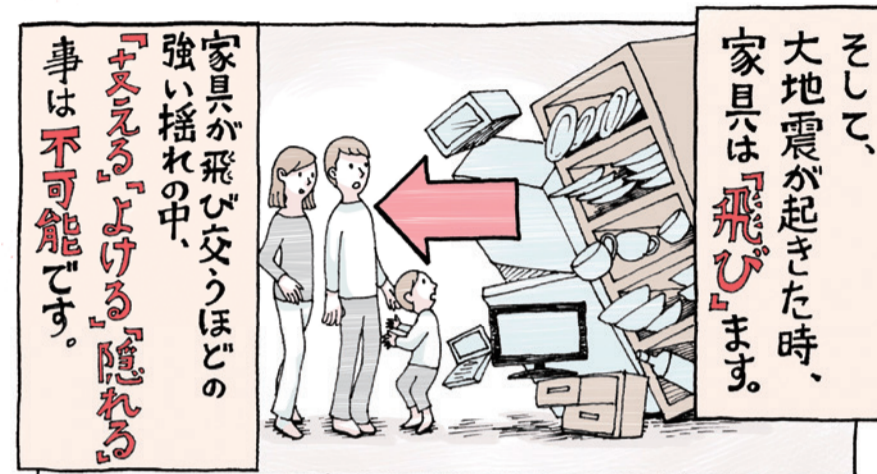
 **日本赤十字社**
Japanese Red Cross Society



大地震がくると暴れだす!? あなたの家は本当に安全ですか? おうちの中のモンスター!

9月1日は防災の日。そして8月30日から9月5日までは国の定めた防災週間です。いつやってくるか分からない大地震。実は、家の中にこそ大きな危険が潜んでいます。自分と家族の命を守るために、自宅の中の危険な箇所やその対策を確認して備えましょう。

けがの原因 = 3~5割が家具類の転倒・落下!!



新潟県中越沖地震(2007年)、岩手・宮城内陸地震(2008年)、熊本地震(2016年)など、2003~2016年に発生した震度6弱以上の地震でけがをした原因を調べると、約30~50%の人が、家具類の転倒・落下・移動によるもの*でした。けがをする以外にも、転倒・落下した家具類が電気ストーブなどの電源スイッチを押してしまい、付近の燃えやすいものに着火するなどして火災が発生することがあります。また、通路や出入り口周辺、共有部分に家具類を置いておくと、避難経路を塞いでしまったり、つまずいたりして、避難の妨げになることがあります。震度6弱以上の地震では、立っていることが困難になり、固定していない家具の大半が移動したり倒れたり、窓ガラスが割れることなどがあります。来たるべき大地震に備え、しっかり対策をしましょう。

*東京消防庁「家具類の転倒・落下・移動防止対策ハンドブック 令和4年度版」より

割

窓ガラス

雨や風など、家の外でどんなに天気が悪くても、閉じればしっかり守ってくれる窓ガラス。だけどアイツが来ると震えて大きな音で割れ、ガラスの破片となって攻撃してくるモンスターに。落ちた破片で大けがすることも。

落

時計

毎日正確な時間を教えてくれる壁掛け時計。ソファの上など、家族が集まる場所の近くの壁に飾られている。アイツが来ると高いところから襲ってくる。

倒落

冷蔵庫・電子レンジ

おいしい料理を作るときのかげがえのない相棒。冷蔵庫と電子レンジ。アイツが来ると電子レンジがジャンプして上から落ちてくる。重たい冷蔵庫もパターンと倒れてくる。

家の中は危険がいっぱい 家具や家電の対策を!

大地震が発生した場合、家具や家電などは、大暴れするモンスターに変身してしまうかも! 家族が集まるリビングにはテレビや窓ガラス、壁掛け時計、キッチンには冷蔵庫や電子レンジ、寝室にはたんすなど、家の中には凶暴化すると手がつけられないモンスター予備軍があちこちに潜んでいます。「たぶん落ちてこないから大丈夫」「まさか倒れるわけがない」と思い込まず、今まで体験したことのない大きな揺れが起きたらどうなるかを想像して、対策を考えましょう。

倒

テレビ

映像と音で私たちを楽しませてくれるテレビも、アイツが来るとまるで大きなハンマーのよう! グラグラと揺れて、目の前にいる人をたたくように襲う。

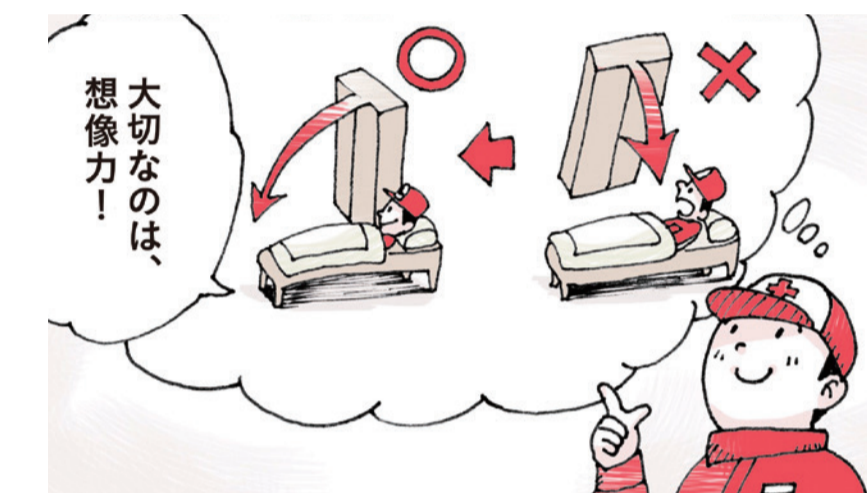
倒

たんす

たくさんの洋服をしまっているたんす。アイツが来ると一斉に引き出しが暴れだし、勢よく飛び出して危険なモンスターになる。たんすごと倒れてくることも。

家族みんなで考えよう! 家の安全性を高める3ステップ

大切な家族を地震から守るには——。まずは家の中の危険を確認することから始めましょう。



- 1 平面図を描いてみる**
家の間取り図を描き出してみよう。そして、家具や家電をできるだけ詳しく描き込んでいきます。ポイントは「窓」と「出口」を忘れずに描いておくことです。
- 2 危険な箇所・家具に×印をつける**
①の平面図を見ながら、地震が起きたときに「そこにあるものがどうなるか?」をイメージして、危険だと思う箇所や家具類の上に×印を描き込みます。「想像力」を発揮して倒れてきそうなもの、動きそうなもの、落下しそうなものを見つけてください。
- 3 危険な箇所への安全対策を施す**
転倒・落下対策など
まどガラスなどにガラス飛散防止フィルムを貼ったり、
寝室の下にマットを敷いたり
足を守るために「丈夫なスリッパ」などを寝室に用意しておくのもOK!
「食器の下に滑り止めマットを敷く」などがあります。割れた破片から足を守るために丈夫なスリッパなどを寝室に用意しておくのもよいでしょう。

ACTION! 防災・減災 特設サイトで命を守る情報を!

「ACTION! 防災・減災」プロジェクトの特設サイトでは、避難に役立つ情報や災害に備えるノウハウなどの「命を守る」情報を掲載しています。家の中の点検とともに、家族や身近な人たちと一緒にサイトを見ながら防災力を高めましょう。

詳しくはコチラ →

TOPICS

第48回フローレンス・ナイチンゲール記章 授与式

世界中の看護師にとって最高の荣誉である「フローレンス・ナイチンゲール記章」。第48回受章者は2021年5月に発表されましたが、コロナ禍により授与式は延期。今年8月、参加人数を減らすなどの対策を徹底しながら厳かに式が開催され、日本赤十字社名誉総裁である皇后陛下から、藤田千代子さん、苫米地則子さんのお二人に記章が授与されました。

8月10日、東京・港区の東京プリンスホテルにて、日本赤十字社名誉総裁の皇后陛下、名誉副総裁の秋篠宮皇嗣妃殿下、寛仁親王妃信子殿下、高円宮妃久子殿下ご臨席の下、第48回フローレンス・ナイチンゲール記章の授与式が行われました。3年ぶりの授与式はコロナ禍で人数を減らして開催したため、看護学生による恒例のキャンドルサービスはありませんでしたが、誉れある受章をたたえる式典では、皇后陛下からベシャワール会 PMS支援室長兼総院長補佐の藤田千代子さん、日本赤十字社医療センター 国際医療救援部副部長の苫米地則子さんに、記章が授与されました。

同記章は、近代看護を確立したフローレンス・ナイチンゲール氏の生誕100周年を記念して1920年に創設されました。紛争や災害時の看護活動、公衆衛生や看護教育などに多大な貢献をした世界各国の看護師などの中から、2年に一度、赤十字国際委員会の選考によって受章者が決定されます。日本人の受章者は今回のお二人を含め112人で世界最多です。

藤田さんは、パキスタン・イスラム共和国やアフガニスタン・イスラム共和国などでその国の言語を習得し、病状の治療および治療の可能性を自らの言葉で説明できる専門家として活躍。地域社会が主体となり、健康増進や病気の予防、治療など社会全体でアプローチをするPHC(Primary Health Care)の分野を担える現地の女性スタッフ育成に取り組む活動などが評価されました。苫米地さんは、多国籍の3711人が乗った大型クルーズ船内における新型コロナウイルス感染症対応救護班の総括調整者としての医療活動をはじめ、多くの国際救援活動での経験が認められての受章となりました。受章を受けて、藤田さんは「終生忘れることのできない感動で胸がいっぱいです」、苫米地さんは「私自身も看護師として現役ですし、叱咤激励を受けたと感じました。看護師として働いている方々や目指している方々と共にこれからも一緒に頑張っていこうと思います」と述べました。



皇后陛下から記章を授与される苫米地さん

受章者 **藤田千代子**さん
ベシャワール会 PMS支援室長兼総院長補佐



1989年にベシャワール会創設者・故中村哲医師と出会い、1990年にパキスタン・イスラム共和国の州都ベシャワールのミッション病院に赴任。同国やアフガニスタン・イスラム共和国などの支援活動を行い、PMS(ピース・ジャパン・メディカル・サービス)病院の看護部長を務めました。2009年に帰国した後も、現地スタッフと連携しつつ人道支援活動を継続しています。

受章者 **苫米地則子**さん
日本赤十字社医療センター 国際医療救援部副部長



1997年にスーダン紛争で国際救援活動に携わって以来、計17回の国際派遣を経験。2018年、世界最大といわれるバングラデシュ南部避難民キャンプにて医師・看護師などをまとめるチームリーダーを務めたほか、2020年には横浜港に停泊する乗員乗客3711人の大型クルーズ船内で、未知のウイルスに対応する救護班の総括調整者として活動しました。

わたしも赤十字

今月の表紙



寄付の協力者

むらかみ ゆかこ
村上由佳子さん

静岡県静岡市/32歳/会社員

主人が背中を押してくれた日赤への寄付。自分に合った形で参加できる活動です

赤十字にはさまざまな形で活動に参加する支援者がいます。

全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。

昨年、静岡県支部の創立130周年記念赤十字大会で高円宮妃久子殿下から金色有功章を授与いただきました。恐れ多くて、緊張しました。

私は中学生の頃からボランティアに興味を持ち始め、大学では福祉を学びながら障害児サポートや海外ボランティアなどを経験。誰かの役に立つこと、人のために何かできることが喜びです。けれども今は4人の子供がいて、なかなか自分の時間も持てず、支援先に出向いての活動は難しい。そんなとき、夫が「今から日赤に寄付してくる」と言うので、そうか、そういう支援の形もあるのか、と。それなら私も、と寄付先を探しました。日赤を勧めてくれたのは夫です。彼は経営者の視点で、寄付が生かされる、信頼できる組織を選んでいました。暑い日も寒い日も献血の呼び掛けをされている姿には頭が下がります。災害時に日赤が支援に向かう姿もニュースで見っていました。いろいろ検討した結果、私も日赤を選びました。

私がボランティアを始めたのは、困っている人を助けられる人になりたかったから。学生時代、目の前で転んでしまったお婆さんがいて、とっさに動けず、周りの人がすぐに駆け寄ったのを見て、動けない自分にショックを受けました。誰かが困っているとき、すぐに動ける人間になりたい。そのことは、子どもたちにも話しています。いじめられていたり、何か困っている子がいたら、見て見ぬふりをしないで、と。赤十字はボランティアの育成にも力を入れていますが、これからも人の役に立つ活動を続けてくれると期待しています。

寄付するあなたも赤十字です

- クレジットカードで寄付
- 郵便局・銀行の口座振替
- 郵便局・銀行の窓口
- お近くの日本赤十字社窓口



TOPICS

令和4年8月3日からの大雨による災害 日赤が各地で救護活動を展開

令和4年8月3日、山形県に大雨特別警報が発表され、翌4日午前2時には新潟県にも同警報が出されました。今回の大雨は、各地で河川の氾濫や土砂災害を引き起こし、広範囲で停電や断水などのライフラインへの影響も発生。多くの人命が危険にさらされ、またはその恐れが生じたことから、山形県、新潟県、石川県、福井県および青森県の35市町村に災害救助法が適用されました。

日本赤十字社は災害発生直後から救護班などを被災地へ派遣。被災地域での巡回診療、被災地診療所での医療支援などの対応に当たり、救護班として

従事した職員は延べ65人となりました。また、情報収集や災害ボランティアセンターの活動調整のため関係機関へ延べ36人の職員を派遣しました。毛布1332枚、緊急セット478セット、安眠セット155セット、タオルなど1233枚、飲料水150本の救援物資が、青森、秋田、山形、福島各県支部から被災地へ配布されました。

その他、石川・新潟・秋田県支部の赤十字ボランティア延べ114人も、炊き出しや熱中症・感染症予防の啓発、災害ボランティアセンターの運営支援、被害住宅の片付け、救援物資の輸送協力などの活動を行いました。

※派遣職員数、物資の数量は8月15日時点のもの



山形県 救援物資を搬送する山形県支部職員



新潟県 被災された家々を回る新潟県支部(長岡赤十字病院)救護班



福井県 医療支援を行う福井県支部(福井赤十字病院)救護班

「令和4年8月3日からの大雨災害義援金」受け付け中

受付期間：令和5年3月31日(金)まで

協力方法：① ゆうちょ銀行・郵便局

口座記号番号：00190-2-515136

口座加入者名：日赤令和4年8月3日からの大雨災害義援金

② 銀行振込

三井住友銀行 すずらん支店 普通 2787585

三菱UFJ銀行 やまびこ支店 普通 2105583

みずほ銀行 クヌギ支店 普通 0620561

口座名義はいずれも「日本赤十字社(ニホンセキジュウシヤ)」

日本赤十字社では、この大雨災害による義援金を受け付けております。皆さまからお寄せいただきました義援金は、被災地の方々の生活を支援するため、被災都道府県が設置する義援金配分委員会へ全額をお送りします。(配分先：山形県、新潟県、石川県、福井県、青森県)



献血 まるわかり 辞典

「なるほど!」と思わずヒザを打つ
“献血にまつわる豆知識”を紹介。
第6回のテーマは、献血後に分かる「検査結果」の活用術です。



けんさ-けっか

【検査結果】

献血は“誰かのため”だけでなく
自身の健康的な生活のヒントに

献血は、輸血を必要とする人のために行うものではありませんが、実は献血する人の健康維持にも役立つことをご存じですか？

献血を行うと、血圧・脈拍、生化学検査7項目、血球計数検査8項目の充実したデータによって体の状態を把握することができ、さらに献血Web会員サービス「ラブラッド」では過去(2005年4月以降)の検査結果と比較することが可能になります。数値の意味や、基準値の説明、「どうしたら「献血できる健康」を維持できるか」などのアドバイスもあり、自分の健康維持や管理にとっても役立つのです。

年に1回受ける健康診断は良好な結果だったにもかかわらず、献血後の血液検査によって、急性白血病や急性肝炎といった“急速に悪化する”重大な病気の早期発見につながった事例は実際にあります。また、定期的に健康診断を受けていない方の場

| 生化学検査 | 血球計数検査 |
|------------------|--------------------|
| ALT(GPT) | 赤血球数 RBC |
| γ-GTP | ヘモグロビン量 Hb |
| 総蛋白 TP | ヘマトクリット値 Ht |
| アルブミン ALB | 平均赤血球容積 MCV |
| アルブミン対グロブリン比 A/G | 平均赤血球ヘモグロビン量 MCH |
| コレステロール CHOL | 平均赤血球ヘモグロビン濃度 MCHC |
| グリコアルブミン GA | 白血球数 WBC |
| | 血小板数 PLT |

【検査通知例】

臓器の健康度を示す血中の酵素量 (ALT、γ-GTP)、血中の栄養度を示す蛋白量 (TP、ALB、A/G) などが献血後に分かります。詳しくは →→→→→



合、献血の検査で“隠れ脂肪肝”“隠れ糖尿病”といわれる疾患の予兆が発見されるケースも…。

なお、献血をする前には事前検査(少量の採血)があり、血圧・体温の測定のほかヘモグロビン濃度が調べられ、基準値に満たなかった場合は献血を行うことはできません(海外渡航歴や、直近の投薬・服薬の有無なども確認されます)。これは、安全かつ治療に有効な血液を確保するだけでなく、提供者の健康を守る(貧血などを防ぐ)意味もあります。

健康は何物にも代えがたい財産。“誰かのため”だけじゃなく、“自分のため”にも献血を健康維持に生かしてみませんか？

献血Web会員サービス
「ラブラッド」
詳しくはこちら ▶▶▶





大阪府 **福島県** **宮崎県**

「体験」することで気づきが生まれる 各地でさまざまな防災への取り組み

7月24日、日赤大阪府支部では「親と子の防災セミナー」を開催しました。対面での開催は3年ぶりとなります。防災知識を楽しく学ぶ「ぼうさいクイズ」、「身近なものを使った応急手当」、阪神・淡路大震災の被災体験を伝える「語り部の講話」を通じて、防災の意識を親子で高める取り組みを行いました。

8月16日、福島放送の番組内の企画で、福島県住みます芸人・べんぎんナッツが非常食作りを体験した様子が放送されました。2人は釜の組み立てや調理から試食までの一連の流れを体験し、「災害時に温かいごはんが食べられるのはありがたいですね」と災害時に活躍する赤十字奉仕団の活動を称賛。県民の防災意識向上につながる機会となりました。

宮崎県の高鍋高校のJRC(青少年赤十字)部の生徒23人が、「災害ボランティアセンター」にてボランティアを円滑に行うための活動を体験。生徒が運営側とボランティア役に分かれ、災害支援の流れを学びました。



身近なものを使った応急手当の様子 非常食作りを体験するべんぎんナッツ(中央) 災害時のボランティア活動を学ぶ生徒たち

京都府

「溺者発見！」水上安全指導の様子を動画で紹介

7月1日～2日(1泊2日)に京都府青少年海洋センターにて赤十字水上安全法救助員Ⅱ養成講習会(WSⅡ)が約2年ぶりに開催されました。久しぶりの講習会でしたが、7人の受講者が集まり、全員が見事合格。講習会の様子は日赤京都府支部のYouTubeチャンネルにて公開しています。



受講者は海で溺者を救助する難しさや事故防止の大切さを学んだ

神奈川県

浜辺のボランティア清掃 コロナ禍でも社会貢献を楽しむ

6月下旬、青少年赤十字(JRC)加盟校の県立武山看護学校の高校生が、県内のJRCメンバー45人や赤十字ボランティアらと共に三浦海岸の清掃活動を行いました。この活動はJRC100周年に合わせて企業が企画した「next100」活動の一環。活動終了後、生徒は「楽しかった。危険なゴミを拾えた」と感想を述べ、次の参加にも意欲的。社会貢献を楽しむ貴重な機会となりました。



「生徒が自己有用感を持てる活動ができた」と学校指導者

茨城県

売り上げの一部を寄付に！和菓子の自販機で日赤を支援

2017年から日赤への寄付つき和菓子「きぬのまゆ玉」を販売する筑西市の和菓子店「館最中本舗 湖月庵」。上野貴則社長は、日赤茨城県支部の呼びかけに応じ、和菓子の赤十字支援型自動販売機を設置しました。売り上げの一部が日赤への寄付となるシステムに、「楽しく商品を買ってもらい、お客様と共に社会貢献ができる」と自販機の稼働に期待を寄せています。



設置企業だけでなく、購入者も手軽に社会貢献に参加できる

埼玉県

コロナ禍での看護師育成 逼迫する医療現場からもエール

第7波の感染拡大中の8月、埼玉県内の3つの赤十字病院で日赤看護大学さいたま看護学部の学生が実習を行いました。中にはウエルカムボードまで作成し温かく迎え入れた病院も。人員不足や救急の受け入れ困難などが多発する状況でも「これから共に現場に立つ仲間を育てる」という思いで学生の実習を受け入れた各病院。看護学生はその思いに応え真摯に実習に臨みました。



さいたま、小川、深谷赤十字病院で看護の基礎実習を実施

愛知県

ウクライナ人道危機を契機に脚光 国際人道法の出前講座

ウクライナ人道危機により国際人道法への関心が高まっています。6月29日、愛知県赤十字国際人道法普及奉仕団は県支部の地域奉仕団からの「国際人道法を詳しく学びたい」という声を受け、国際人道法の出前講座を開講。同普及奉仕団が作成した国際人道法や赤十字のことを分かりやすく紹介するミニ本を使って講義を行い、人道についての理解促進の場となりました。



国際人道法についての講座を熱心に聞き入る地域奉仕団の方々

京都府

警察学校で実施される 命と身体を守る救急法講習

新たに京都府警察職員になった人は、警察学校の初任教養を受ける中で、救急法を学びます。指導に当たるのは、赤十字救急法指導員の試験に合格した警察官。今年度は約125人が命と身体を守るための救急法の習得を目指しました。骨折部位を固定する応急手当のほか、実際の事故現場を想定した訓練の中で、自分たちの行動を振り返る総合演習を行いました。



通常講習の倍近い時間をかけて、救急法の知識と技術を学ぶ

福井県

米や野菜、スイカに菓子も... とも園へフードドライブ実施

日赤福井県支部のあわらし赤十字奉仕団は、家庭で使い切れない食材を持ち寄り、困っている人に届ける「フードドライブ」を実施しています。7月19日、同奉仕団の土田ゆり子委員長は団員らが集めた米や野菜、スイカ、菓子など約50品目をあわら敬愛こども園へ寄贈。これらの食品は、同園が運営する「こども食堂 まる」で活用するほか、食料を必要とする方に配られました。



善意のこもった食品を受け取る、こども園の渡邊一幸園長(左)

石川県

北陸大学奉仕団と青年奉仕団が 豪雨被災地で復旧支援

豪雨による浸水被害を受けた小松市で、日赤石川県支部に所属する北陸大学赤十字奉仕団と青年赤十字奉仕団が復旧支援活動を実施。8月6・7日、県内に熱中症警戒アラートが発令される中、家具の運び出し洗浄、災害ゴミの分別などを行い、団員は「災害時を想定した日頃の準備が生かされ、素早く対応できてよかった」「まだまだ終わりは見えない。再度参加します」と話しました。



浸水被害のあった民家から、泥水に漬かった畳を運び出す奉仕団員

高知県

「一日赤十字」 治療奉仕団が 無料マッサージを提供

7月13日、日赤高知県支部主催で、高知県立盲学校の生徒および教員が、地域の方へ無料マッサージを行う治療奉仕活動を2年ぶりに行いました。会場では地元奉仕団が会場準備や消毒作業などを行い、参加者が安心して施術を受けられるよう準備。参加者からは「体が軽くなって走れる」と喜びの声が。長らくコロナ感染症対策でたまった疲れを和らげる活動となりました。



無料マッサージは「一日赤十字」と称する地域貢献活動のひとつ

赤十字はじめて物語

日本赤十字社の9つの事業 その出発点にはそれぞれの「はじまり」のストーリーがありました。

vol. **6** 講習事業

戦時のみならず、平時の保健・衛生問題への取り組みを開始

世界各国で実施される赤十字の講習事業。その誕生のきっかけは第一次世界大戦終結後に誕生した「赤十字社連盟」設立にまでさかのぼります。1919年5月、各国赤十字社の国際的連合体として赤十字社連盟(後の国際赤十字・赤新月社連盟:IFRC)が設立。1863年創設の赤十字国際委員会(ICRC)が、戦争・紛争の犠牲者の保護と救援を使命としているのに対し、連盟は、戦時ではない平時の赤十字事業として、災害や感染症などに対応する活動を使命に掲げました。その一環として保健・衛生上の問題を改善させる講習事業を奨励したのです。日赤では1920年の第1回赤十字社連盟総会后、誰もが参加できる講習会をスタート。当初は「衛生講習会」として健康教育や保健指導が行われ、後に救急法と家庭看護法(現在の健康生活支援講習)が加わりました。健康や安全を目的とした講習は時代の流れや社会のニーズの変化とともに進化し、現代に引き継がれています。



健康的で安全な生活のための知識を市民に普及



衛生講習会から始まった講習事業は現在、救急法、水上安全法、雪上安全法、幼児安全法、健康生活支援講習の5種類に発展しました

「赤十字を応援！」プレゼント パートナー企業紹介 vol.29 **JA熊本果実連**

「感謝応援プロジェクト」でコロナ禍の医療従事者への支援を継続

熊本県果実農業協同組合連合会(JA 熊本果実連)は1954年に設立し、青果物の生産指導・販売および清涼飲料水の製造・販売、農産物の加工販売を行っています。「地域社会の発展に貢献する連合会を目指す」という会訓のもと、地域の宝である「水」を守るため平成16年から地下水涵養事業にも協力しています。

新型コロナウイルス感染症拡大時には熊本赤十字病院へ熊本県産の果実を使った「みかんジュース」を寄付。長らく感染状況を受け、県内の医療従事者と保健所職員へ「ぎゅっと日本の野菜」など計6万1000本の飲料製品を約1万3000人に配布する「感謝応援プロジェクト」を実施しました。同連合会は献血にも積極的に参加。さらに、系列会社である(株)ジュシーと共に、同県支部へ寄付を長年続けており、さまざまな面から日赤の活動を支援しています。

令和4年2月上旬、熊本明利会長(右)は大西一史市長(左)を訪ね、6000本の「ぎゅっと日本の野菜」を熊本市役所に贈呈した。これまでに、計6万1000本を医療従事者等に配布している

上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 9月号を手にした場所(例/献血ルーム) ⑥9月号に関するご意見・ご感想 ※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からののお知らせのみに利用いたします。

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS 9月号プレゼント係
FAX/03-6679-0785 WEB応募/右の2次元コードからご応募ください。
9月30日(金)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから応募できます

ぎゅっと日本の野菜 (125ml×24本入り/1ケース)



国産の野菜をふんだんに使い、うめ果汁をアクセントに仕上げた野菜飲料。砂糖・甘味料・食塩不使用

WORLD NEWS

ウクライナ人道危機



X線撮影装置の操作方法を指導する大島隆嗣技師(左)と現地の放射線技師マルクスさん

「紛争は身近な自分事」 人々の高まる関心を日赤が独自調査

ウクライナ人道危機に関する、日本人々の意識調査から見てきたものとは。そして日赤や国際赤十字による、避難民支援の拡大。最新のウクライナ支援について、活動の一部をご紹介します。

紛争への国民意識の高まり 今後の人道危機を見据え、新たな課題も

2月24日に激化したウクライナ人道危機から半年が経過。さらなる長期化が懸念される中、日赤では全国1200人の男女を対象に「ウクライナ人道危機と支援に関する調査」(7月4日～6日)を実施しました。

日常生活において影響を感じている人は8割に上り、「電気やガスの料金が上がった」「食費の支出が増えた」など物価に関する回答が上位に上がりました。

本調査で、個人としてウクライナ人道危機に対する支援をした人は40.3%で、その内容は「寄付や募金」「支援につながる商品購入やサービス利用」など、身近にできる支援に取り組んだ人が多かったようです。

さらには、危機発生後に「海外で発生した紛争や人道危機」への関心が高まったと回答した人は64.3%。またそれ以上に「日本で発生するかもしれない紛争や人道危機」について関心が高まったと回答した人は65.4%と、全体的に人道危機やその可能性への関心が高まった実態が明らかになりました。

今回の調査から、ウクライナの事案は日本に住む人々が紛争や人道支援を「身近な自分

事」と捉える契機になったことがうかがえますが、一方で人々の意識や行動が改めて可視化されたことで、今後の支援のあり方、将来的に日本国内で起こり得る人道危機への備えなど、新たな課題も浮かび上がってきました。

紛争の長期化と増加する避難民 彼らを支える支援のネットワーク

ウクライナ赤十字社は500人の職員と8000人以上のボランティアと共に最前線で支援活動を展開し、約548万人へ支援を届けています(2022年7月14日時点)。ウクライナ国外への避難民が累計1000万人*1に上る中、国際赤十字・赤新月社連盟および、ポーランドやハンガリーといった周辺国の赤十字社では国外避難民に対する支援活動を続けています。日赤からも救援物資の管理者や薬剤師、こころのケアのノウハウを指導する臨床心理士など、海外救援の経験豊富な人材をウクライナや周辺国に派遣しました。

現地では今も医療施設への攻撃が多数報告されており、1450万人*2以上の人が適切な医療サービスを受けられず治療や薬を必要としています。日赤はウクライナ赤十字社の医療を支援するために、フィンランド赤十字社

と協力し、ウクライナ西部の街ウジュホロドに診療所を設置し、持ち運びが可能なX線撮影装置を寄贈しました。この装置はトラックなどに載せてさまざまな場所へ運び、巡回診療などで活用することも想定されています。特殊な精密機器であるため、日本からウクライナへの適切な運搬と操作の指導も兼ね、日赤の診療放射線技師の大島隆嗣さん(日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院)を同国に派遣しました。

3月2日から受け付けを開始した「ウクライナ人道危機救援金」は63億円を超え、うち50億円を送金(8月5日時点)、国際赤十字を通じて現地のニーズに即した活動を行っています。今後も紛争の被害に苦しむ人々を支える活動を展開していきますので、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

*1 2022年8月1日時点:UNHCR発表

*2 2022年8月12日時点:OCHA発表



日赤の活動をまとめた動画は、二次元コードからご覧いただけます

皆さまからお寄せ頂いた「ウクライナ人道危機救援金」などから国際赤十字に対して以下のとおり緊急資金援助を実施しています。

合計支援金額 **50.2**億円 ※2022年8月5日時点
(内訳:IFRC 25.1億円/ICRC 25.1億円) 詳しくはこちら⇒



© Atsushi Shibuya / JRCs

赤十字、 世界の「現場」から

国際赤十字・赤新月社連盟(IFRC)、赤十字国際委員会(ICRC)、日赤の事業地で切り取られた1枚。知られざる世界の赤十字活動。

少女たちは談笑しながらミシンを踏む。ここは、バングラデシュ南部避難民キャンプ内にある赤十字の支援施設。激しい暴力から逃れてきた避難民の多くが心の傷を抱えている。赤十字は、心の傷を癒やし、健康と安心を取り戻すためのプログラムの一環として、語り合いながら楽しく作業ができる場を提供している。

日赤は、バングラデシュ赤新月社スタッフや避難民ボランティア約80人と共に避難民キャンプでの保健医療支援を実施。13万2800人以上を診療したほか、9万9000人以上に「こころのケア」を行い、感染症予防のための地域保健活動にも力を入れている。(2017年9月～2022年3月延べ実績数)